



左から藤本社介氏、乾久美子氏、隈研吾氏、池上一夫氏。撮影：新建築社写真部

「街っぽさのある集合住宅」

——人・もの・ことを包み込む集合住宅を考える 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本社介×池上一夫

2013年5月15日、長谷工コーポレーションにて

今年で第7回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念して第1回が開催され、これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらいました。第1回「300人のための集合住宅」では密度、第2回「30年後の集合住宅」では時間に対する変化、第3回「30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅」では建て替え、第4回「10の違うものが集まる100戸の集合住宅」ではさまざまなものが集まることを考えてもらいました。また、震災後の第5回「再び『集まって住むこと』の豊かさ」では改めて集合住宅が持ち得る「豊かさ」、前回の第6回「身近な場所のリノベーション」では自分に縁のある敷地のリノベーションがテーマとなりました。第7回の開催に先立ち、今回の課題や、今、集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方々話し合っていました。（編）

身近な場所と向き合う

——まず、前回のコンペはいかがでしたか。

隈 前回は各自で敷地となる身近な場所を探して、集合住宅を提案してもらいましたが、自分たちで敷地を探すことのハードルが高く、難しい課題だったのかなと思います。しかし、自分の身の回りの状況と向き合ったことで、作品のレベルが上がっており、審査していて楽しかったです。また、世の中に普及している集合住宅のほとんどは、まとまったボリュームを持っていますが、既存の住宅地を集合住宅として捉えるなど、提案の幅が広く興味深いものでした。

乾 そうですね。さまざまな題材が取り上げられており、若い学生のみなさんが着目しているものや場所が見えてきて、興味深く見させていただきました。応募者自らの身近な場所を敷地として選んだことで、提案にリアリティが出ていたのかなと思います。しかし今年は新たなチャレンジとして、より多くの学生が課題にアプローチできるようなテーマがよいのではないのでしょうか。

藤本 前回は建築部分だけでなく、実際の住まい方などより深い部分まで掘り下げられた提案が多く、非常におもしろかったです。受賞作品は敷地の

状況がしっかりと読み込まれ、提案がリアリティを持っており、それらには強く共感できました。

池上 建築ストックの活用や街の再生など、多くの作品が社会的な状況をしっかりと捉え、提案していたと思います。建築の提案だけでなく、その先に豊かな生活を描こうとしていたのが、印象に残っています。また、地車（だんじり）や列車を提案に上手に取り入れた案も見られ、提案の幅の広さにも驚かされました。

「小さいこと」から考える

——では、今、集合住宅で考えるべきテーマではどんなことが考えられますか。

隈 前回は既存の建築物や街のリノベーションにおもしろさが見られました。でも、集合住宅という建築物の特徴を活かして、ロジックを組み立てた提案は、ほとんど見られませんでした。たとえば、私が普段の設計で考えている「小ささ」という視点で集合住宅を捉えると、住居ユニットという小さなものが集合して大きなボリュームをつくり出していることに大きな可能性があると思います。近年では家族という単位だけでなく、単身者が集まりシェアして住むなど、生活の単位が多様になっています。家族よりも小さい家族構成や住まい方まで考えることで、新しい集合住宅を提案できるかもしれません。

藤本 そうですね。私は集合住宅そのものも小さな街のようなものだと思っています。集合住宅を街の中にある小さな街だと捉え、隈さんがおっしゃったように、さらにその小さな街の中にある小さなものまで考えられると、おもしろいと思います。

乾 街から小さなものまで連続して考えられるとよいですね。たとえば、集合住宅や街の核となる公共施設など、ある程度のボリュームを持つ建築を新しくつくる場合、必然的に周りの街並みや風景を再構築する意味が出てきます。日本の多くの街に活力がなくなってきたと言われる今日において、そのような建築の意味や力は非常に重要でしょう。応募者の方々には、設計した建築が周りの街

を刺激することで、新しい街や風景が見えてくるような提案を期待したいです。

生活の仕組みをデザインする

藤本 個人的なことですが、最近タワーマンションに引越して、その快適さに驚きました。改めて、生活を支える仕組みやベースの部分の重要性を感じています。その一方で、オートロックなどのしっかりしたセキュリティに守られているため、周囲の街から孤立してしまっているようにも感じています。

池上 確かに藤本さんがおっしゃったマンションのオートロックシステムなどによる快適性は、今日の住まい手が求めていることです。そうした、建築の中だけで完結していることは、強みでもあり弱みでもあります。たとえば、敷地全体にセキュリティをかけることで子どもたちが敷地内で安全に遊ぶことができます。その反面、外の街に住んでいる子どもたちやご高齢の方との交流はなくなってしまいます。このことは、私も問題視しています。集合住宅を周囲に開き、常に人の目がある状態の方が、セキュリティとしてはよい環境だと言えるのかもしれません。

また、長谷工は環境に配慮したスマートマンションにも取り組み始めました。これも生活を支える仕組みに対するアプローチですが、スマートメーターなどの機械的なことだけでなく、パッシブデザインを積極的に設計に取り入れています。日本の住宅スタイルは四季折々変化のある自然環境を暮らしの中に上手く取り入れており、そのためにすだれ、障子、雨戸といったたくさんの道具があります。集合住宅と街との付き合い方もこのような関係であってほしいと思います。

乾 スマート化など機械で快適さを確保するのかが、人の手を使って快適にするのかという違いだけで、ずいぶん提案の方向性が変わると思います。私は古い集合住宅に住んでいるのですが、管理人のおじさんが留守中の宅配物を受け取ってくれたり、共有廊下などの掃除もしてくれます。タワーマンシ

ョン以上のサービスを受けているのかもしれませんが（笑）。そのかわりに管理人のおじさんとコミュニケーションを取って仲よくなる手間はかかるのですが、私はそこに楽しさを感じていますし、タワーマンションにはない豊かさがあると考えています。人の手を使う仕組みは非常に重要であり、集合住宅を周囲の街と繋げていく可能性を持っていると思います。**隈** なるほど。しかし、乾さんがおっしゃった管理人のような人的資源をどうやって更新していくかという問題もありますよね。人の手を使うのか、機械を使うのか、どちらがサステナブルに生活の豊かさを提供できるかということは、われわれも考えていかなければならないことです。

集合住宅という街

藤本 僕が住んでいるマンションは、中に入ると快適なのですが、外のコミュニティから無縁の閉じた場所になるように感じます。その他の集合住宅を見ても、周囲の街の人びととの共有空間をつくらうとしている動きはほとんど見られません。一部ではそのような動きはありますが、まだ少ないように思います。しかし、閉鎖的なコミュニティの問題や、日当たりの問題なども含めて、敷地の内外で起きている摩擦に対する問題意識を、誰しもが少なからず持っているのではないのでしょうか。私はタワーマンションが持つ便利さだけでなく、その先にある豊かさを考えたいですし、その部分を若い人たちにも提案してもらいたいです。

池上 そうですね。最近は持続的な豊かさを持つ集合住宅にするために、頑丈な構造躯体だとかメンテナンスフリーの仕上げ材などを使用したいというニーズが多くなっていますが、そのことには疑問を感じることがあります。入居者が愛着を持ってマンションの手入れをしたり、入居者やその周辺に住む人びとが住空間づくりに参加することで、そのマンションや街が共に成長していくことが重要なのではないかと思うからです。先日、最後の同潤会上野下アパートが解体されましたが、それを含めた

多くの同潤会アパートは集合住宅でもあり、街でもあったと思います。住民たちによる建物のメンテナンスや、地域住民にも開放された共同施設も見られました。集合住宅として自立しつつ、街とも上手く接続しており、とても豊かな集合住宅でした。

隈 同潤会アパートは「街っぽさ」を持った集合住宅でしたね。いろいろな人やもの、ことを包み込んだ建築だったと思います。その「街っぽさ」がハードの設計によってつくられたのか、時間の経過によって徐々につくられたのかということは重要な部分ですね。

池上 最初から街として完成している集合住宅ではなくて、10年後、20年後の将来も合わせて描くような提案もおもしろそうですね。

隈 なるほど。応募者の方々には「街っぽさ」を持つためには何が必要なのかを考えてもらうといいですね。実は、建築が完成した時には何か欠点を持っている方が、それを改善しようとコミュニケーションを取ることで、「街っぽさ」に繋がっていくかもしれません。実際に、「街っぽさ」をつくらうとして計画された住宅地は街風には見えるのですが、実は周囲に対して閉じてしまっていることが多い。

乾 そうですね。敷地内にとどまらず、既存の

街に自然に繋がっていくような、「街っぽさ」というのは魅力的です。提案者である若い人たちが自分たちも住んでみたいと思えるだけでなく、さまざまな年齢や立場の方が住んでみたい、あるいは、住民の友人として訪れてみたいと思うような場所や建築を提案してほしいですね。

隈 3,000㎡の敷地に100戸ほどの規模であればリアリティを持ちつつ、「街っぽさ」を持った集合住宅を考えられるのではないのでしょうか。

池上 そうですね。単身者よりも家族が主に住まうような集合住宅が、より多様な提案を期待できると思います。

藤本 テーマはどうしましょうか。「街っぽさのある集合住宅」でいかがでしょうか。

隈 よいと思います。「街っぽさ」という言葉には、若い人たちも共有意識やイメージを持ってくれるのではないのでしょうか。また、「街っぽさ」という言葉の中にたくさんの意味が含まれていますし、先ほど言った「小ささ」に通じる語感があると思います。敷地のことや規模や、持続可能性や、コミュニケーションなどたくさん考えることができます。——それでは、今回のテーマは「街っぽさのある集合住宅」といたします。

（2013年5月15日、長谷工コーポレーションにて
文責：本誌編集部）



第6回「身近な場所のリノベーション」最優秀賞作品「へだたりのつながり」石飛亮 武井良祐（横浜国立大学大学院）